

郷桜井堀遺跡3次

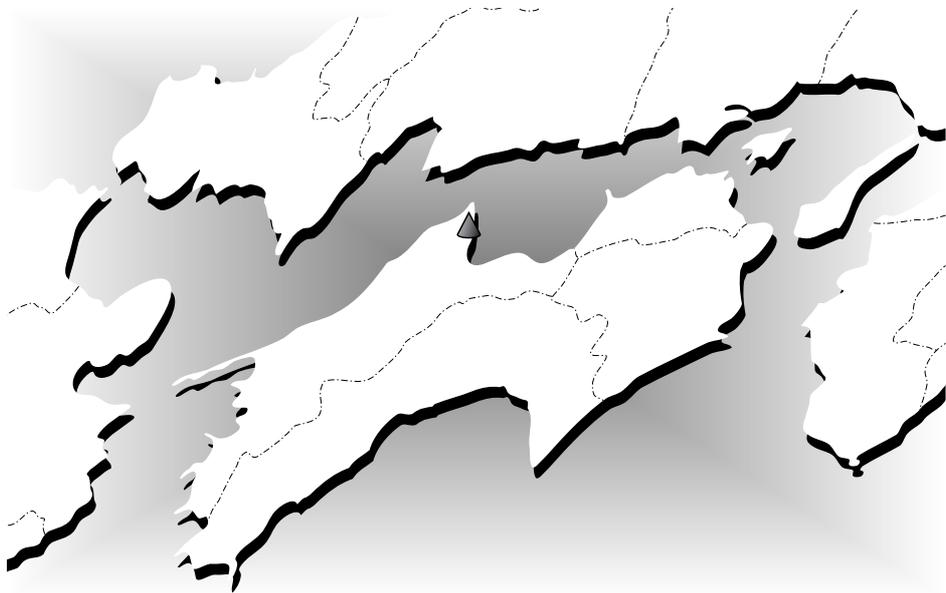
—一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書3—

2008.3

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

郷桜井堀遺跡3次

—一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書3—



2008.3

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、県道桜井山路線整備に関連し、愛媛県の委託を受け、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが、平成19年10月に今治市郷桜井の同予定地で実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行することとなりました。

今回の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出いたしました。

今後、本報告書が地域の歴史や考古学研究の資料として、活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に対しましてご理解とご協力をいただきました愛媛県をはじめ、ご指導いただいた関係機関の皆様ならびに地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
理事長 野本 俊二

例 言

- 1 本報告書は、愛媛県今治市郷桜井に所在する郷桜井堀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および報告書の作成は、県道桜井山路線の整備に伴い、愛媛県の委託を受け、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成19年10月に実施し、整理作業および報告書の作成は平成20年3月に実施した。
- 4 発掘調査および整理・報告書の作成は、次の職員が担当した。
眞鍋昭文 藤井崇史
- 5 発掘調査および報告書作成において、下記の職員および作業員の協力を得た。
職 員
池尻伸吾 大野由美子 土井光一郎 福山裕章

現場作業員
井出順子 宇高利雪 大澤敏郎 越智繁敏 芝田邦夫 瀬野宏幸 矢野里子
青野泉

整理作業員
仙波仁美 高田正名 竹村洋子
- 6 本報告書の執筆・編集は眞鍋が行った。

凡 例

一覧表の略記号表記例

遺構の略号

遺構種	略号
竪穴住居	SL..
土坑	SK..
溝	SD..
柱穴・小穴	SP..

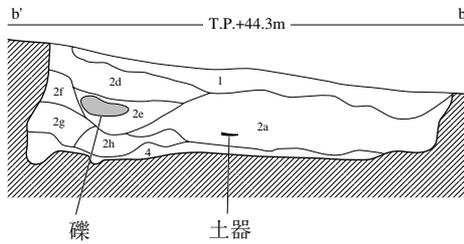
柱穴一覧の土質区分

特 徴	区 分
灰色粗砂混じりシルト	A
灰褐色細礫混じり細砂	B
黒色細礫混じりシルト	C

遺物一覧の略記号

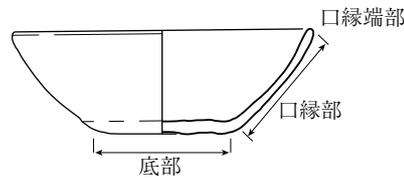
略記号	内 容
L	長 さ
W	幅
H	器高・高 さ
T	厚 直 径
R	直 径
MR	最 大 径
HR	孔 径
TR	口 径
NR	頸 部 径
LR	底 部 径
g	重 量
o	外 面 値
i	内 面 値
(cm)	推 定 値
[g]	残 存 値

遺構の表現例

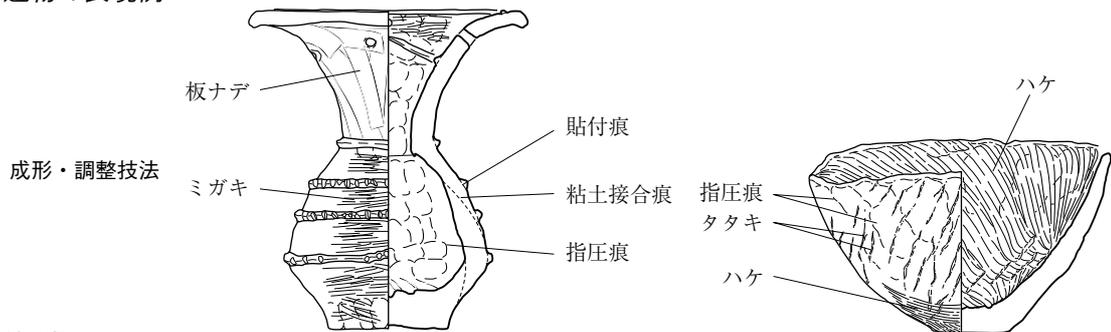


土層断面図中の網伏せは礫、塗りつぶしは土器を示す。

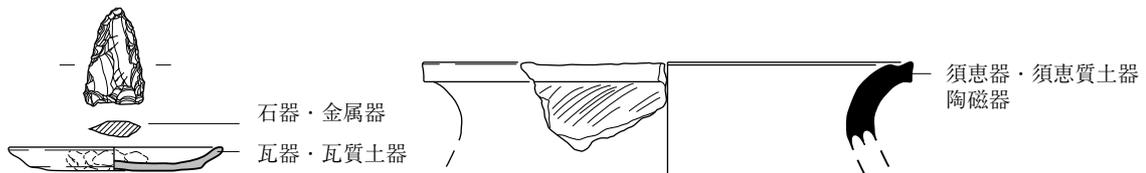
杯の部位名称



遺物の表現例



断面表記



素焼きの中世土器は、皿・杯類を土師器、そのほかを土師質土器とした。

土色・土器の色調については、『新版 標準土色帖(2002年度版)』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に拠る。煩雑さを避けるために、弥生土器の壺形土器・甕形土器などの「形土器」は省略した。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過.....(真鍋).....	1
第1節 調査に至る経緯と経過.....	1
1 確認調査.....	1
2 調査の経過.....	1
第2節 調査の体制.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....(真鍋).....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
1 縄文時代以前.....	3
2 弥生時代.....	3
3 古墳時代.....	4
4 古代以降.....	4
第3章 調査の概要.....(真鍋).....	5
第1節 地形と調査区.....	5
第2節 基本層序.....	5
第3節 遺構と遺物の概要.....	5
第4章 遺構と遺物.....(真鍋).....	7
第1節 竪穴住居.....	7
1 SI1.....	7
第2節 土坑.....	7
1 SK1.....	7
2 SK2.....	7
3 SK3.....	11
4 SK4.....	11
5 SK5.....	11
6 SK6.....	11
7 SK7.....	12
8 SK9.....	13
9 SK10.....	13

第3節 溝.....	13
1 SD1	13
2 SD2	13
第4節 柱穴.....	14
1 SP1.....	14
2 SP23.....	14
3 SP32.....	16
4 SP49.....	16
5 柱穴出土の遺物	16
第5節 III層出土の遺物.....	16
1 弥生時代の遺物	16
2 古墳時代の遺物	18
3 古代・中世の遺物	18
第5章 まとめ	(真鍋)21

図 目 次

図1 調査区の位置	0
図2 周辺の遺跡分布	2
図3 遺構配置・基本層序	8
図4 遺構と遺物(1).....	9
図5 遺構と遺物(2).....	10
図6 遺構と遺物(3).....	12
図7 柱穴出土の遺物	16
図8 包含層(III層)出土の遺物.....	17

表 目 次

表1 調査体制	1
表2 主要遺構一覧	6
表3 柱穴一覧	15

表4	掲載遺物一覧	19
表5	出土遺物一覧(1).....	20
表6	出土遺物一覧(2).....	20

図 版 目 次

図版1	上:遺跡遠景(霊仙山より)／下左:遺構検出状況(北西より)／下右:完掘状況(北西より)
図版2	上:基本層序西壁(北より)／下:基本層序西壁(東より)
図版3	上左:SI1土層断面(東より)／上右:SI1完掘(北より) 中左:SK1土層断面(東より)／中右:SK1完掘(南東より) 下左:SK2土層断面(西より)／下右:SK2完掘(北西より)
図版4	上左:SK3土層断面(東より)／上右:SK4土層断面(北西より) 中左:SK4完掘(北西より)／中右:SK5北-東土層断面(北より) 下左:SK5南-西土層断面(南より)／下右:SK5完掘(北西より)
図版5	上左:SK9・SK6土層断面(東より)／上右:SK7・SK8土層断面(東より) 中左:SK9東-西土層断面(南より)／中右:SK9完掘(北西より) 下左:SK10東-西土層断面(南より)／下右:SD1土層断面(西より)
図版6	上左:SD2土層断面(東より)／上右:SD1・SD2完掘(北西より) 中左:SP1遺物(3)出土状況(南上より)／中右:SP1完掘(東より) 下左:SP23土層断面(東より)
図版7	出土遺物:SK4出土遺物(1)／SD2出土遺物(2)／SP1出土遺物(3)／SP25出土遺物(4) SP30出土遺物(5)／III層出土遺物(6～15・17～24)



図1 調査区の位置

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

1 確認調査

愛媛県今治地方局(以下「地方局」)は県道桜井山路線改良工事に伴い、今治市郷桜井1丁目の同予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「桜井小中学校遺跡」に隣接していることから、愛媛県教育委員会(以下「県教委」)とその取り扱いについて協議を行い、平成19年8月に県教委が試掘調査を実施した。その結果、中世の遺跡の存在が確認された。

2 調査の経過

試掘調査の結果、工事に先立ち記録保存のための発掘調査の実施が必要となったことから、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター(以下「県埋文センター」)が地方局から委託を受け、平成18年10月に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、平成19年9月から調査準備を行い同10月11日に着手した。発掘調査にあたっては、県教委の試掘成果および2次調査における土層の堆積状況を参照しながら、機械力を用いて包含層(Ⅲ層)の直上まで表土層を除去したのち、人力で包含層を掘り下げ、包含層の下面で遺構の検出作業を行った。遺構検出後、各遺構の掘り下げを行い、それらの作業と並行して平・断面図の測量および写真撮影などの観察・記録を実施した。

なお、測量については、基準点(WGS84系測地成果2000)を調査区周辺に打設してこれを用いた。また、遺物の取り上げについては、層位・遺構ごとに行い、必要に応じて出土状況図を作成し、現地における発掘調査は10月29日に終了した。なお、今回の調査は郷桜井堀遺跡としては平成15年度、平成18年度に次ぐ3ヶ年目の調査となるため、郷桜井堀遺跡3次調査とした。

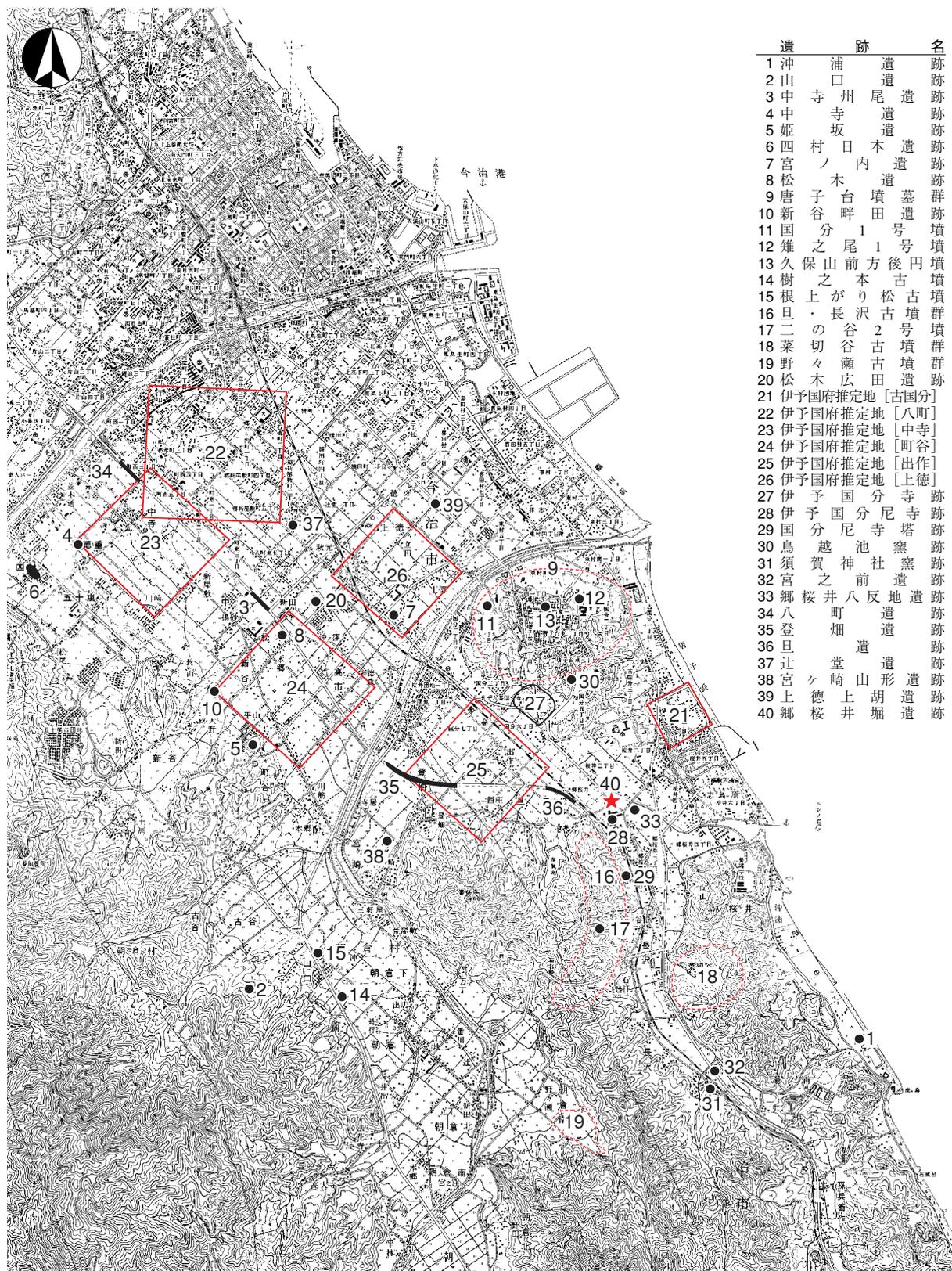
発掘調査で得られた資料については、遺構・遺物の図面や写真類を県埋文センターが、出土遺物を県教委がそれぞれ保管している。

第2節 調査の体制(表1)

発掘調査および報告書作成の調査体制は表1のとおりである。

表1 調査体制

		平成19年度			
理事長	野本俊二				
常務理事	日野孝雄				
総務課長	竹田真二				
調査課長	岡田敏彦				
調査第二係長	眞鍋昭文				
派遣調査員	藤井崇史				



遺跡名	遺跡名	遺跡名	遺跡名
1	沖浦	遺跡	跡跡
2	山口	遺跡	跡跡
3	中寺	州尾	遺跡
4	中寺	坂遺	跡跡
5	姫村	日本	遺跡
6	四ノ	内遺	跡跡
7	宮ノ	木遺	跡跡
8	松子	台墳	墓群
9	唐新	谷畔	遺跡
10	国分	1号	墳墳
11	雄之	尾方	1号墳
12	久保	山前	後円墳
13	樹之	本古	墳墳
14	根上	が沢	古墳群
15	且長	谷古	墳墳
16	二の	切々	古墳群
17	野松	木田	遺跡
20	伊予	国府	推定地
21	伊予	国府	推定地
22	伊予	国府	推定地
23	伊予	国府	推定地
24	伊予	国府	推定地
25	伊予	国府	推定地
26	伊予	国府	推定地
27	伊予	国分	尼寺跡
28	伊予	国分	尼寺塔跡
29	鳥越	池社	跡跡
30	須賀	神前	跡跡
31	宮郷	八反	跡跡
32	登登	畑遺	跡跡
33	且上	遺跡	跡跡
34	宮上	ヶ崎	山形遺跡
35	宮上	ヶ崎	山形遺跡
36	宮上	ヶ崎	山形遺跡
37	宮上	ヶ崎	山形遺跡
38	宮上	ヶ崎	山形遺跡
39	宮上	ヶ崎	山形遺跡
40	宮上	ヶ崎	山形遺跡

図2 周辺の遺跡分布

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

郷桜井堀遺跡が所在する今治平野は高縄半島北東部に形成された沖積平野である。市町村合併以前の旧今治市は今治平野をその市域としていたが、現在の今治市は隣接していた波方町・大西町・玉川町・朝倉村および菊間町と芸予諸島の吉海町・宮窪町・伯方町・関前村の10市町村が合併し、県下最大級の市域を有している。陸地部と島嶼部は来島海峡で隔てられている。来島海峡は古来より海上交通の要衝であるとともに難所として知られ、現在でも国際航路として船舶の往来が頻繁で、同時に、海難事故が多発する海域としても知られている。

市の中心をなす今治平野は地質学的には領家花崗岩帯に属し、海浜に接する幅1～2kmの範囲は海岸砂堆列を含む三角州性の低地で、内陸部は蒼社川・頓田川などの主要河川によって形成された扇状地および扇状地性の氾濫源である。土壌は花崗岩を母材とする風化土(バイラン土)であり、水持ちが悪く、低地部では地下水位が極めて高い。

桜井地区は今治平野南端に位置し、北を独立丘陵の唐子山、西を霊仙山、南東を向山に囲まれた南北に細長い低地である。山裾の集落を郷桜井、臨海部の集落を浜桜井と呼ぶ。

第2節 歴史的環境(図2)

1 縄文時代以前

旧石器時代では、伯方島や大三島など芸予諸島の島嶼部および旧玉川町・旧朝倉村などの内陸部の遺跡から、国府型ナイフ形石器や有舌尖頭器などが出土している。今治平野では最近までは未発見であったが、近年、高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡の自然流路から角錐状石器が出土している。

縄文時代の遺跡は島嶼部や海浜部に数多く分布している。特に、沖浦遺跡(1)や糸大谷遺跡・馬島亀ヶ浦遺跡・江口貝塚などの後晩期の集落が顕著である。一方、内陸部においても阿方遺跡・中寺州尾遺跡(3)・辻堂遺跡(37)などから後晩期の良好な資料が出土している。

2 弥生時代

前期前半では中寺州尾遺跡(3)・阿方遺跡・旦遺跡(36)などで遠賀川系土器が出土している。前期後半から中期初頭にかけては阿方遺跡(貝塚)・片山貝塚・姫坂遺跡(5)、中期前半では宮ヶ崎山形遺跡(38)・中寺遺跡(4)など、丘陵裾部に集落が営まれている。中期後半になるとこれらの集落は衰退し、阿方頭王遺跡群や阿方中屋遺跡など丘陵性の集落が主流となる。後期後半になると四村日本遺跡(6)・松木遺跡(8)などのように再び沖積低地に集落が営まれる。後葉から終末にかけては頓田川左岸に、宮ノ内遺跡(7)や松木広田遺跡(20)などのような大規模集落が営まれている。

3 古墳時代

頓田川右岸の唐子台丘陵は弥生時代終末の墳丘墓に端を発する県内屈指の古墳密集地域で、前期の国分1号墳(11)・雉之尾1号墳(12)、中期のお茶屋池前方後円墳、後期の治平谷古墳群など、百を越える古墳が造営された。また中期以降には旧朝倉村域でも造墓が盛んとなり、中期の樹之本古墳(14)、後期には県下最大の群集墳である野々瀬古墳群(19)などが造営された。

集落遺跡は頓田川水系の新谷畦田遺跡(10)・上徳上胡遺跡(39)などが知られている。最近の調査例では、他地域からの多量の搬入土器が出土した松木広田遺跡(20)が目される。

4 古代以降

古代の今治平野は越智郡と呼ばれ、奈良時代には国府・国分寺(27)・国分尼寺(28)が置かれた伊予の政治・経済・文化の中心地であった。『和名抄』に「国府在越智郡」とあり、国府が今治平野に存在したのは確実であるが、その所在については諸説(21～26)あり、発掘調査で検証された例もなく、未だ特定するには至っていない。国分尼寺は詳細な所在は不明であるが、桜井小中学校付近であることは確実である。また、唐子台丘陵南斜面の鳥越池窯跡(30)や長沢の須賀神社窯跡(31)は、これらの寺院の屋根を葺く瓦を生産した遺跡と考えられている。また、蒼社川右岸には中寺廃寺もある。これら古代寺院の伽藍配置の詳細は不明であるが、発掘調査で確認された遺構は、いずれも正方位を指向し、現存する条里地割りには整合していない。そのほか、長沢から孫兵衛作を経由して周桑平野へ至る峠には、古代山城である永納山城が築かれている。太政官道である南海道は当然これらの官的施設を結んでいた(永納山城→国分尼寺→国分寺→国府)と考えられ、現在の県道桜井山路線から大きくは外れないものと考えられるが、考古学的な検証は未だ行われていない。

中世の遺跡では、頓田川右岸に登畑遺跡(35)・旦遺跡(36)・郷桜井八反地遺跡(33)などの集落遺跡が知られている。また、唐子山山頂には国分城が築かれた。国分城は能島村上氏の居城で、水軍壊滅後は福島正則の居城となった。江戸時代になって藤堂高虎が今治城を築城するまでは、国分城は今治地域の中心であった。

参考文献

- 大瀧雅嗣 1989 『一般国道196号今治道路II』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 田坂嘉則 1994 『郷桜井八反地遺跡』 今治市教育委員会
- 白石聡 1997 『新谷畦田遺跡発掘調査報告書』 今治市教育委員会
- 原畑静佳 1998 『登畑遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 谷若倫郎 1998 『四村日本遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 田坂嘉則 1999 『伊予国分尼寺遺跡』 今治市教育委員会
- 三好裕之ほか 2000 『旦遺跡』 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 藤村啓修 2001 『伊予国分寺確認調査』 今治市教育委員会
- 白石聡 2002 『松木広田遺跡(松木遺跡群)I』 今治市教育委員会

第3章 調査の概要

第1節 地形と調査区(図1)

調査区の絶対位置は、北緯34°01'52"、東経133°01'50"の交差する付近で、現地表面の標高は3.3m前後である。行政区分上は今治市郷桜井1丁目で、調査前は宅地であった。調査区は頓田川右岸に広がる沖積低地の南端に位置し、南側には、回廊状の谷地形(長沢)が南北に長細くのびる。郷桜井堀遺跡はこの谷から平野への開口部付近に占地している。古代官道は長沢から国分尼寺、郷桜井堀遺跡を經由して国分寺へ至るルートをとっていたものと考えられる。

今治平野は現存する条里地割りが正方位に対して約45度傾いていて、県道桜井山路線もこれに沿っている。このため、調査区は北西から南東へのびる長さ約18m、幅約1.5mの帯状となっている。調査対象面積は25m²である。

第2節 基本層序(図3)

I層は真砂土造成土、II層は造成前の水田耕作土層である。IIa層は耕作土層、IIbおよびIIc層は酸化鉄集積層である。IIb層は雲状の酸化鉄斑紋が認められ、IIc層の酸化鉄集積度は顕著で結核をなす。

III層以下は粒径の異なる砂の互層堆積層である。III層とIV層はともに生成要因を同じくする堆積層であるが、上層の水田耕作による影響を受けて酸化鉄斑紋を含み、マンガン結核の発達が著しく、かつ、土壌化が進行した上層部分をIII層、無機質な下層部分をIV層として分層した。調査区中央より南東側では、粒径の異なる砂層の間に褐色を呈するシルト層(IVe・IVf層)が認められることから、IV層は河川の堆積作用を生成要因とする自然堤防の可能性が考えられる。III層は古墳時代以降の遺物包含層で、III層下面が遺構検出面である。

第3節 遺構と遺物の概要(図3・表2)

検出した遺構は竪穴住居1棟・土坑10基・溝2条・柱穴51である。検出面はIII層下面である。ほとんどの遺構は詳細な時期が不明であるが、大半は中世の所産で古墳時代および古代の遺構が少数混じっているものと考えられる。竪穴住居や土坑など主要な遺構については表2に一覧し、各節で詳述した。柱穴は特記すべき事項のあるものについては詳述し、それ以外については表3に一覧した。

出土遺物は須恵器・土師器・土師質土器など古墳時代以降の遺物が大半を占めるが、弥生土器もごく少量ながら出土している。出土総点数は674点で、内訳は弥生土器6点(内1点掲載)・須恵器128点(内5点掲載)・土師器294点(内7点掲載)・瓦器8点(内1点掲載)・土師質土器33点・瓦質土器29点・陶器8点・磁器1点(内1点掲載)・土製品20点(内2点掲載)・弥生土器もしくは土師器の胴部

表2 主要遺構一覧

単位:cm (*):復元値 [*]:残存値 →**:**を切る,←**:**に切られる

種別	遺構名	平面形	長さ	幅	深さ	重複関係	掲載遺物	図	図版
堅穴住居	SI1	隅丸方	—	—	22.6			4	3
土坑	SK1	楕円	[67.4]	78.6	34.6	→SK6,9,10		4	3
	SK2	円	147.1	[105.0]	42.7	→SP39,40,49		4	3
	SK3	不明	—	—	[21.0]	→SP26,←SP29		4	4
	SK4	不整	214.1	[55.8]	11.3		1	4	4
	SK5	隅丸方	98.8	56.0	18.0	→SP36		4	4
	SK6	方?	156.3	[25.0]	24.9	→SK9,←SK1		5	5
	SK7	方?	[123.0]	[21.5]	18.7	→SK8,9		5	5
	SK8	方?	117.1	[22.6]	[17.0]	←SK7,SP48,49			5
	SK9	方?	[147.6]	—	15.1	→SK10,←SK1,6,7,SP4		5	5
	SK10	円	(265.6)	—	[21.0]	←SK1,9,SP39,42~47		5	5
溝	SD1	直線	[150.0]	92.1	16.4	→SP28,51		5	5・6
	SD2	直線	[150.0]	72.8	6.1	→SP50,←SP15	2	5	6

片で判別ができないもの130点・石器2点(内1点掲載)・金属製品15点(内4点掲載)である。これらすべての出土遺物の出土位置や層位等の出土情報・種別・部位・器種・点数等の情報は第4章末の表5・6に一覧した。

また、出土遺物はA～Cの3種に区分して、報告書刊行後に愛媛県教育委員会へ移管するが、各区分は以下の基準によって分別した。

- A...報告書掲載遺物。
- B...報告書掲載分を除く遺物で、胴部片以外の個体。
- C...A・B以外の遺物

第4章 遺構と遺物

Ⅲ層下面で竪穴住居1棟・土坑10基・溝2条・柱穴を検出した。遺物はⅢ層および遺構埋土中から出土した。Ⅲ層下面の標高は調査区の北西側で2.95m、南東側で2.7mと、北西側が高く、南東へ向かって緩やかに傾斜している。遺構の分布は調査区中央のSD1・SD2を境に北西側の斜面高位で密である。

出土遺物の時期は古墳時代から中世に及ぶもので、この間、断続的に集落経営が行われていたものと考えられるが、国分尼寺跡の隣接地であるにもかかわらず、当該期の遺物や国分尼寺に係るような遺物は出土していない。

第1節 竪穴住居

1 SI1(図4)

遺構 調査区北端で検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.92mである。検出範囲は住居の隅で、残りは調査区外へ続くため規模は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは22.6cmを測る。壁面は緩やかに掘り込まれ、坑底は凹凸が認められるもののほぼ水平である。

埋土はにぶい黄褐色を呈する細礫・砂混じりシルトの単層である。黄褐色土や灰褐色土ブロックを含んでいる。

遺物は埋土中から須恵器1点、土師器6点が出土したが、いずれも胴部の小片である。時期の詳細は不明であるが、形状や出土遺物から古墳時代以降と考えられる。

第2節 土坑

1 SK1(図4)

遺構 調査区中央部やや北西寄りで検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.9mである。SK6・9・10を切る。調査区西壁外へ続くため規模は不明であるが、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは34.6cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、中心部がわずかに窪む。

埋土は2層に分層できる。ともに黒褐色を呈し、炭化物が混じる。

遺物は出土していない。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

2 SK2(図4)

遺構 調査区北部で検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.92mである。SP39・40・49を切る。調査区東壁外へ続くため規模は不明であるが、平面形は直径1.5m前後の円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは42.7cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は鍋底状に丸く窪む。

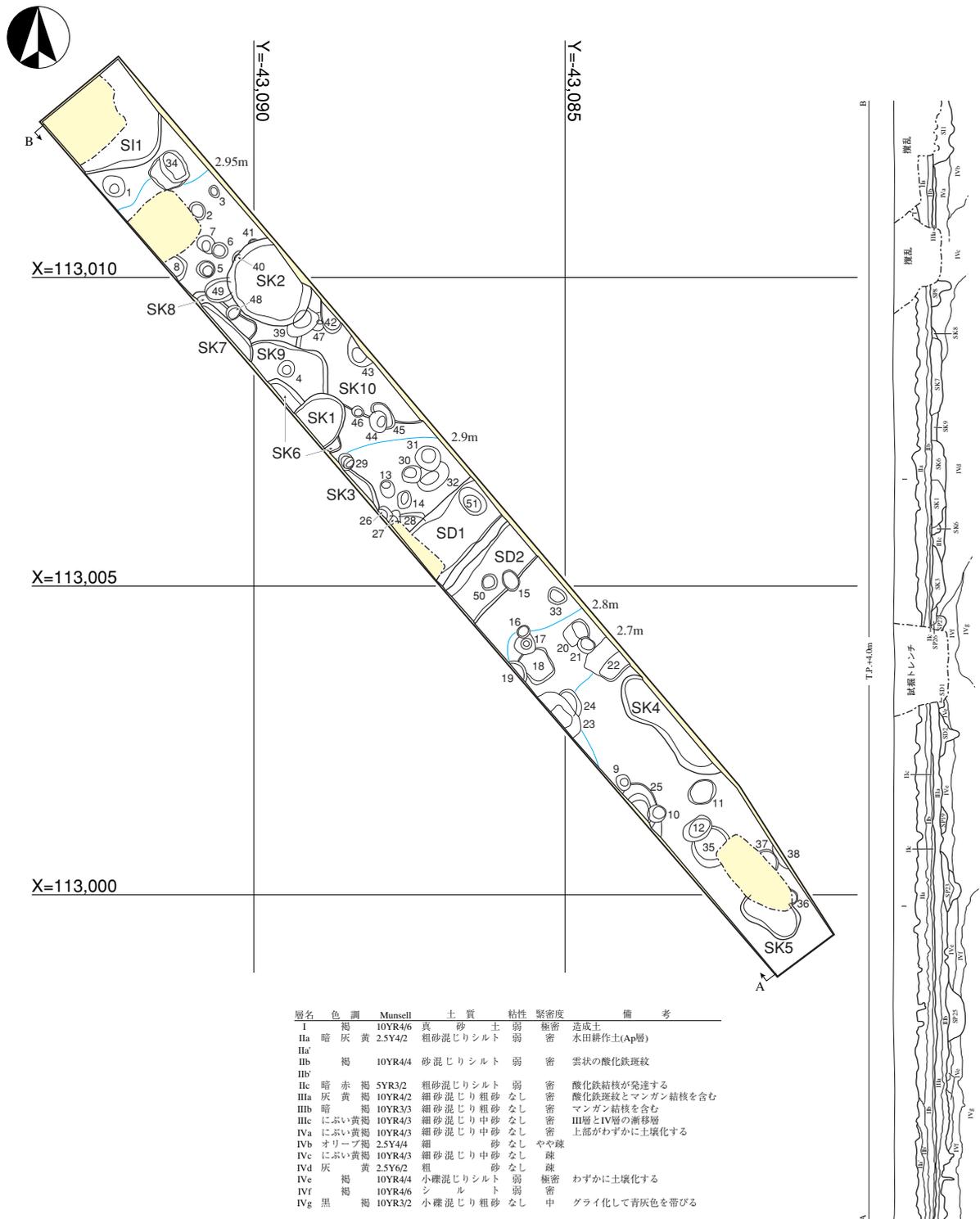
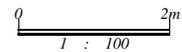
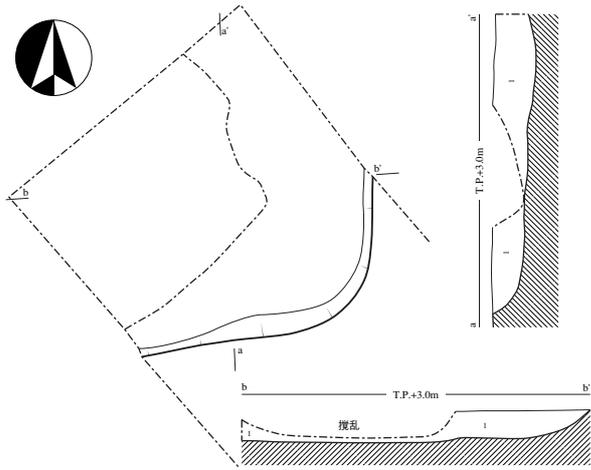


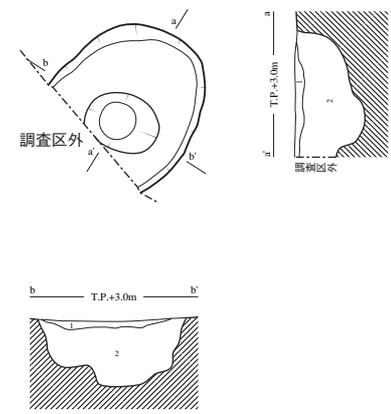
図3 遺構配置・基本層序





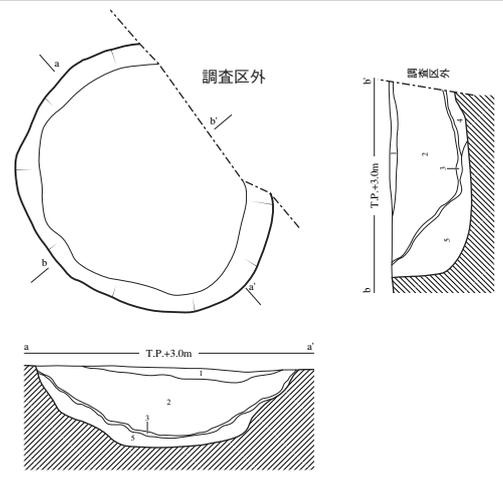
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	にぶい黄褐	10YR4/3	細礫・砂混じりシルト	弱	中	黄褐色土・灰色土ブロックを含む

SI1



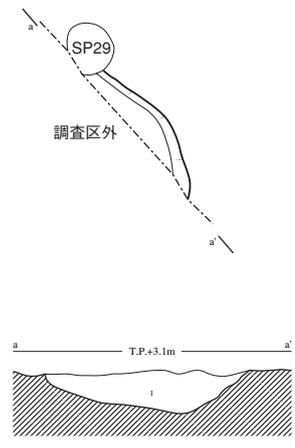
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒褐	10YR2/2	細礫混じりシルト	弱	密	炭化物が混じる
2	黒褐	10YR3/2	シルト混じり粗砂	弱	中	炭化物が少量混じる

SK1



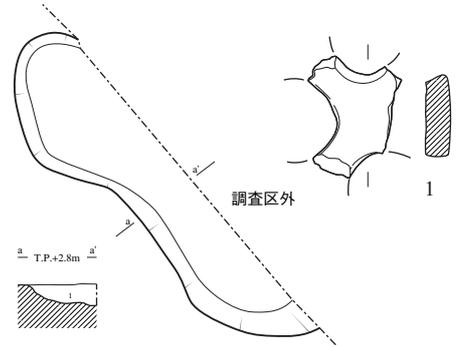
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒褐	10YR3/2	細砂混じりシルト	弱	密	マンガン結核を含み、炭化物が極少量混じる。
2	にぶい黄褐	10YR4/2	シルト混じり粗砂	弱	中	炭化物が極少量混じる。
3	黄灰	2.5Y5/1	粘土混じり細砂	強	疎	
4	褐	10YR4/4	粘土	強	疎	
5	にぶい黄褐	10YR4/3	シルト混じり粗砂	弱	疎	2~3mm大の礫に富む。

SK2



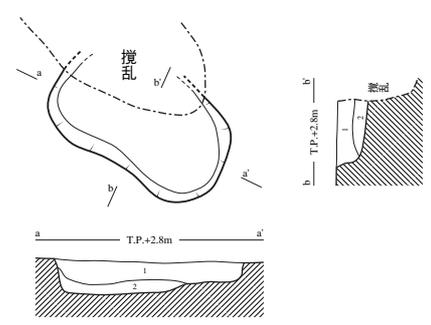
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	暗褐	10YR3/3	シルト混じり砂	弱	中	3mm大の礫・炭化物が混じる

SK3



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒褐	10YR3/2	小礫・砂混じりシルト	中	やや疎	黄褐色土ブロックが混じる

SK4



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒褐	10YR3/2	小礫・砂混じりシルト	中	やや疎	黄褐色土ブロックが混じる
2	暗褐	10YR3/3	細砂混じりシルト	やや強	中	黄褐色土ブロックと暗灰色土ブロックの混層

SK5

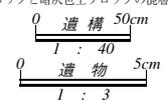


図4 遺構と遺物(1)

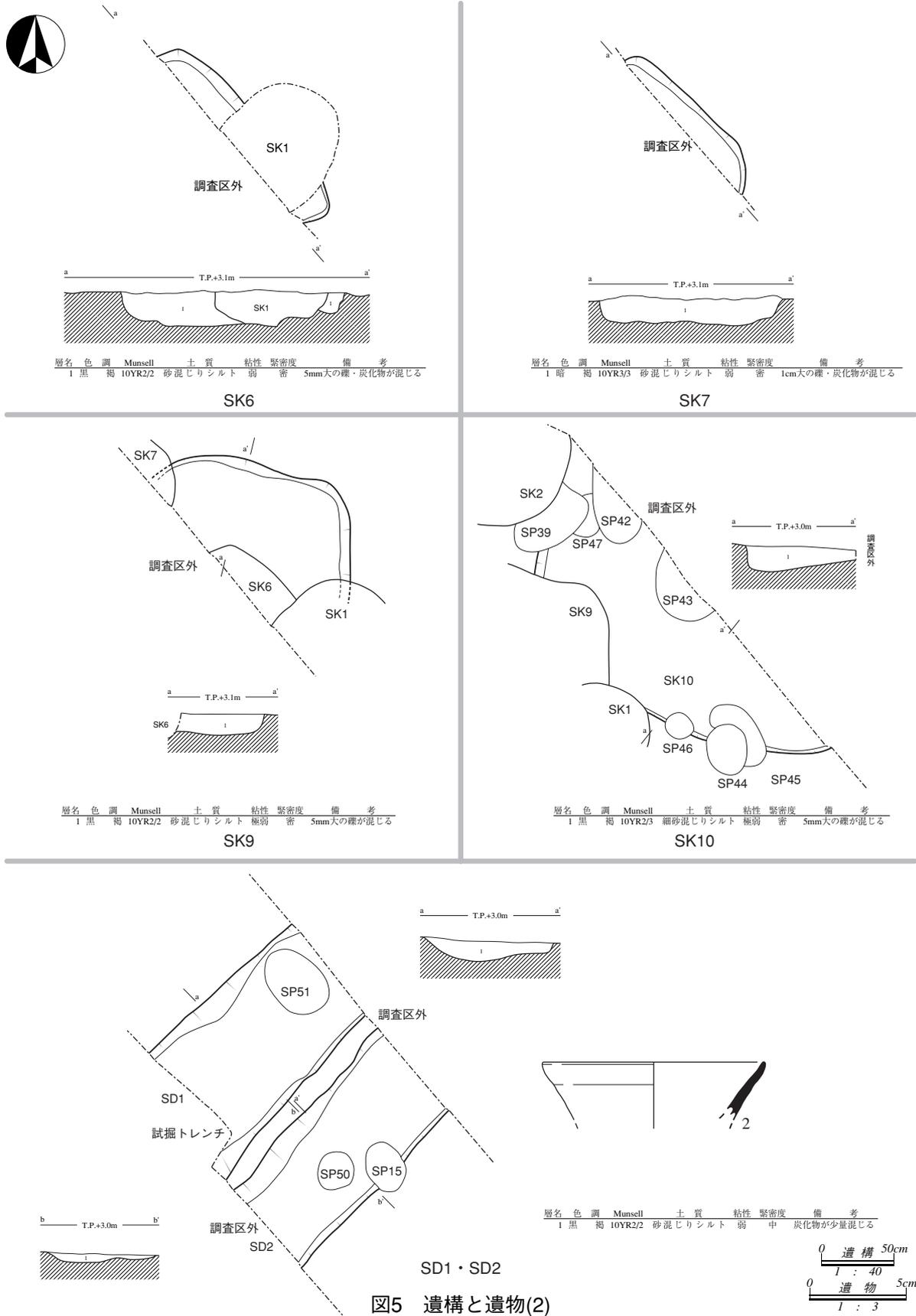


図5 遺構と遺物(2)

埋土は5層に分層できる。いずれも周辺からの流入土である。

遺物は埋土中から弥生土器1点・須恵器3点・瓦質土器2点・土師器13点・土師質土器1点が出土したが、いずれも小片のため図示していない。出土遺物から埋没時期は中世と考えられるが、詳細は不明である。

3 SK3(図4)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面はIII層下面、標高3.0mである。SP26を切り、SP29に切られる。調査区西壁外へ続くため規模・形状とも不明である。検出面からの深さは21.0cmを測る。壁面は緩やかに掘り込まれ、坑底は鍋底状に窪む。

埋土は暗褐色を呈するシルト混じり砂の単層で炭化物が混じる。

遺物は埋土中から須恵器4点・土師器13点が出土したが、いずれも小片のため図示していない。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

4 SK4(図4)

遺構 調査区南部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.66mである。調査区東壁外へ続くため規模は不明であるが、長径は2.14mを測る。平面形は不整形な瓢箪形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは11.3cmを測る。壁面は緩やかに掘り込まれ、坑底には凹凸が認められる。

埋土は黒褐色を呈する小礫・砂混じりシルトの単層で黄褐色土ブロックが混じる。

遺物は埋土中から土師器7点が出土した。いずれも小片であるが甔の底部1点を図示した。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

遺物 1は土師器の甔である。底部の小片で4ヶ所に円形透孔を設ける。

5 SK5(図4)

遺構 調査区南端で検出した。検出面はIII層下面、標高2.7mである。SP36を切る。長辺98.8cm、短辺56.0cmの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは18.0cmを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、坑底は平坦である。

埋土は2層に分層できる。1層は黒褐色を呈する小礫・砂混じりシルト、2層は暗褐色を呈する細砂混じりシルトで、ともにブロック状の土塊が混じる。

遺物は埋土中から須恵器2点・古墳時代の土師器2点・中世の土師器8点が出土したが、いずれも小片のため図示していない。埋没時期は中世と考えられるが、詳細は不明である。

6 SK6(図5)

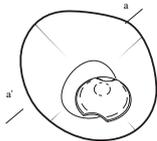
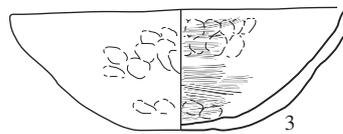
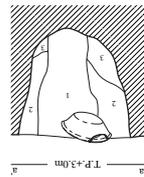
遺構 調査区中央部やや北西寄りで検出した。検出面はIII層下面、標高2.9mである。SK9を切り、SK1に切られる。調査区西壁外へ続くため規模・形状とも詳細は不明であるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは24.9cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は凹凸が認められるがほぼ水平である。

埋土は黒褐色を呈する砂混じりシルトの単層で炭化物が混じる。

遺物は埋土中から土師器1点が出土したが、小片のため図示していない。埋没時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

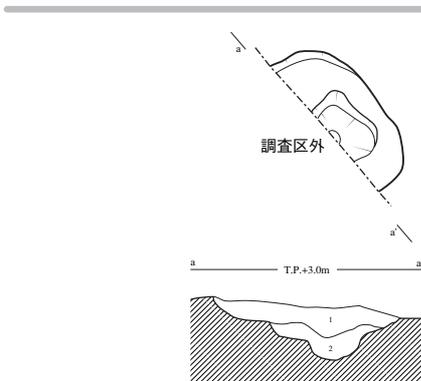
7 SK7(図5)

遺構 調査区北部で検出した。検出面はIII層下面、標高3.0mである。SK8・9を切る。調査区西壁外へ続くため規模・形状とも詳細は不明であるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。



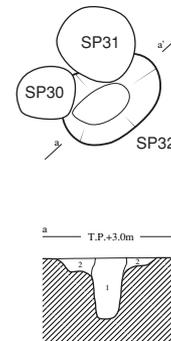
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒褐	10YR2/2	細礫混じりシルト	中	密	柱状流入土
2	黒褐	10YR3/2	細礫混じりシルト	中	密	掘方埋土
3	褐	10YR2/2	細礫混じりシルト	弱	密	にぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する粗砂粒が少量混じる

SP1



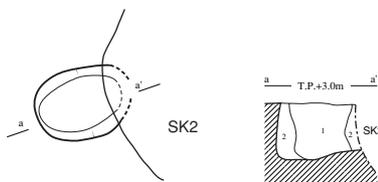
層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	灰黄褐	10YR4/2	砂混じりシルト	中	疎	5mm大の礫・炭化物が混じる
2	にぶい黄褐	10YR4/3	小礫混じりシルト	疎	やや疎	黄褐色土ブロックが混じる

SP23



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒褐	10YR3/1	小礫混じり細砂	弱	密	柱状流入土
2	にぶい黄褐	10YR4/3	小礫混じり細砂	弱	密	暗褐色土ブロックが混じる掘方埋土

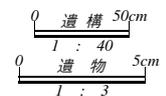
SP32



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	黒褐	10YR2/3	小礫混じり細砂	極弱	やや密	柱状流入土
2	にぶい黄褐	10YR4/3	小礫混じり砂	なし	中	暗褐色土ブロックが混じる掘方埋土

SP49

図6 遺構と遺物(3)



検出面からの深さは21.5cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は凹凸が認められるがほぼ水平である。

埋土は暗褐色を呈する砂混じりシルトの単層で炭化物が混じる。

遺物は埋土中から須恵器2点・土師器11点が出土したが、小片のため図示していない。埋没時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

8 SK9(図5)

遺構 調査区北部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.98mである。SK10を切り、SK1・6・7・SP4に切られる。調査区西壁外へ続くため規模・形状とも詳細は不明であるが、平面形は方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは15.1cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦である。

埋土は黒褐色を呈する砂混じりシルトの単層である。

遺物は出土していない。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

9 SK10(図5)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.88mである。SK1・9・SP39・42～47に切られる。調査区東壁外へ続くため規模・形状とも詳細は不明であるが、平面形は直径2.7m前後の円形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは21.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は平坦である。

埋土は黒褐色を呈する細砂混じりシルトの単層である。

遺物は出土していない。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

第3節 溝

1 SD1(図5)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.84mである。SP28・51を切る。SD2と並行して南西から北東へ直線的に延びる。最大幅92.1cm、検出面からの深さは16.4cmを測る。

埋土は黒褐色を呈する砂混じりシルトの単層で、炭化物が混じる。

遺物は出土していない。時期は中世と考えられるが、詳細は不明である。

2 SD2(図5)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.8mである。SP50を切り、SP15に切られる。SD1と並行して南西から北東へ直線的に延びる。最大幅72.8cm、検出面からの深さは16.4cmを測る。

埋土は黒褐色を呈する砂混じりシルトの単層で、炭化物が混じる。

遺物は弥生土器1点・須恵器4点・土師器13点・瓦質土器2点・土師質土器2点・鉄製品1点が出

土し、須恵器1点を図示した。時期は中世と考えられるが、詳細は不明である。

SD1とSD2は形状・規模とも酷似し、また、埋土も同様であることから、本来は同一の溝で、溝底中央に高まりがあったため、上部が削平されて残った溝底部分が2条の溝状になって検出されたものと考えられる。

遺物 2は須恵器杯の口縁部と考えられる。直線的に外上方へのび、口縁端部付近でわずかに内湾する。口縁端部は丸く収める。

第4節 柱穴

Ⅲ層下面で検出した柱穴は51である。調査区全域にほぼ一様に分布し、特に偏りは認められない。概ね古墳時代以降の所産と考えられるが、時期の詳細については不明なものが多い。また、調査区が狭小で、具体的な建物配置を抽出することができなかった。これらの柱穴のうち、柱痕が認められたSP1・23・32・49については詳述するが、そのほかは、平面形状・規模・埋土・重複関係等の諸元を表3に、出土遺物については章末の表5・6にまとめた。また柱穴埋土中から出土した遺物のうち図示可能なものについては柱穴出土の遺物として掲載した。

1 SP1(図6)

遺構 調査区北部で検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.84mである。平面形は長径38.0cm、短径30.0cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは39.0cmを測る。壁面は急勾配に掘り込まれ、坑底は丸く窪む。

埋土は3層に分層できる。1層は黒褐色を呈する細礫混じりシルトで、柱の抜き取り痕に流入した土砂である。2層は黒褐色、3層は褐色を呈する細礫混じりシルトで掘方埋土である。

遺物は埋土中から土師質土器の小片1点が、1層中から完存する瓦器杯1点が出土した。瓦器杯は柱の抜き取り後に埋納されたものと考えられる。時期は瓦器の年代観から13世紀後半の所産と考えられる。

遺物 3は瓦器杯である。底部は高台を貼り付けない平底であるが、底部と口縁部の境界は不明瞭で、口縁部は内湾気味に外上方へのびる。内外面ともハケで仕上げるが、外面はハケメをナデ消す。内外面とも指圧痕を顕著に残す。

2 SP23(図6)

遺構 調査区中央部南東寄りで検出した。検出面はⅢ層下面、標高2.84mである。SP24を切る。調査区西壁外へ続くが、平面形は一辺85cm前後の方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは11.0cmを測る。壁面は緩やかに掘り込まれ、坑底は中央が一段深く掘り込まれる。

埋土は2層に分層できる。1層は灰黄褐色を呈する砂混じりシルトで炭化物が混じる。2層はにぶい黄褐色を呈する小礫混じりシルトで、黄褐色土ブロックが混じる。

遺物は埋土中から須恵器2点・土師器1点・土師質土器4点・瓦質土器1点が出土したが、いずれ

も小片である。時期は中世と考えられるが、詳細は不明である。

表3 柱穴一覧

単位:cm (*):復元値 [*]:残存値 →**:**を切る,←**:**に切られる

遺構名	平面形	検出面埋土色調	土質	長径	短径	深さ	重複関係	備考	図	図版
SP1	楕 円	黒褐(2.5Y3/2)	A	38.0	30.0	39.0		炭化物が混じる	6	6
SP2	円	黒褐(10YR3/2)	A	26.0	—	19.0		炭化物が混じる		
SP3	円	黒褐(10YR3/2)	A	21.0	—	27.0				
SP4	円	黒褐(10YR3/2)	A	26.0	—	18.0	→SK9			
SP5	円	暗褐(10YR3/4)	B	26.0	—	28.0				
SP6	円	暗褐(10YR3/4)	B	23.0	—	26.0	→SP7			
SP7	楕 円	黒褐(10YR3/2)	A	25.0	—	22.0	←SP6	炭化物が混じる		
SP8	隅 丸 方	黒褐(10YR3/2)	A	[45.0]	[33.0]	20.0		炭化物が混じる		
SP9	楕 円	黒褐(10YR3/2)	A	24.5	21.0	7.0	→SP25			
SP10	円	黒褐(10YR3/2)	A	30.0	—	27.0	→SP25			
SP11	楕 円	黒褐(10YR2/2)	C	45.0	36.0	3.0		炭化物が混じる		
SP12	楕 円	黒褐(10YR3/2)	A	54.0	[30.0]	7.0	→SP35	褐色土ブロック		
SP13	円	黒褐(10YR3/2)	A	27.0	21.0	20.0		炭化物が混じる		
SP14	楕 円	黒褐(10YR3/2)	A	30.0	26.0	22.0		炭化物が混じる		
SP15	楕 円	黒褐(10YR3/2)	A	32.0	—	4.0	→SD2			
SP16	円	灰黄褐(10YR4/2)	A	18.0	—	6.0	→SP17	褐色土ブロック		
SP17	円	黒褐(10YR3/2)	A	33.0	[28.0]	16.0	→SP18,←SP16	炭化物が混じる		
SP18	方	黒褐(10YR3/2)	A	58.0	44.0	9.0	←SP17,19	炭化物が混じる		
SP19	円	灰黄褐(10YR4/2)	A	40.0	[13.0]	10.0	→SP18	炭化物が混じる		
SP20	方	黒褐(10YR3/2)	A	41.0	[32.0]	10.0	←SP21	炭化物が混じる		
SP21	円	黒褐(10YR3/2)	A	30.0	[22.0]	6.0	→SP20,22	炭化物が混じる		
SP22	方	黒褐(10YR3/2)	A	63.0	[59.0]	11.0	←SP21	炭化物が混じる		
SP23	方	黒褐(10YR2/2)	C	86.0	[29.0]	11.0	→SP24		6	6
SP24	楕 円	灰黄褐(10YR4/2)	C	45.0	[23.0]	12.0	←SP23	炭化物が混じる		
SP25	楕 円	黒褐(10YR2/2)	C	[75.0]	[37.0]	27.0	←SP9,10	炭化物が混じる		
SP26	円	黒褐(10YR2/2)	A	[20.0]	[13.0]	15.0	→SP27,←SK3	炭化物が混じる		
SP27	楕 円	黒褐(10YR2/2)	A	[30.0]	—	16.0	→SP28,←SP26	炭化物が混じる		
SP28	楕 円	黒褐(10YR3/2)	A	[43.0]	—	17.0	←SD1,SP27	炭化物が混じる		
SP29	円	黒褐(10YR2/2)	C	26.0	—	26.0	→SK3	炭化物が混じる		
SP30	円	黒褐(10YR2/2)	C	31.0	28.0	37.0	→SP32	炭化物が混じる		
SP31	円	黒褐(10YR3/2)	A	44.0	39.0	32.0	→SP32	炭化物が混じる		
SP32	円	灰黄褐(10YR4/2)	A	55.0	[34.0]	46.0	←SP30,31	炭化物が混じる	6	
SP33	楕 円	黒褐(10YR3/2)	A	32.0	26.0	7.0		炭化物が混じる		
SP34	隅 丸 方	—	A	57.0	52.0	42.0				
SP35	円	黒褐(10YR2/2)	C	64.0	(60.0)	13.0	←SP12	炭化物が混じる		
SP36	円	黒褐(10YR2/2)	C	27.0	—	26.0	←SK5			
SP37	円	黒褐(10YR3/2)	C	44.0	[20.0]	5.0	→SP38			
SP38	円	暗褐(10YR3/3)	C	—	—	—	←SP37			
SP39	楕 円	にぶい黄褐(10YR4/3)	C	57.0	[33.0]	58.0	→SK10,SP47,←SK2			
SP40	円	灰黄褐(10YR4/2)	C	[22.0]	—	26.0	←SK2			
SP41	円	灰黄褐(10YR4/2)	C	[15.0]	—	11.0	←SK2			
SP42	楕 円	黒褐(10YR2/3)	C	[44.0]	[31.0]	18.0	→SK10,SP47			
SP43	円	灰黄褐(10YR4/2)	C	56.0	[28.0]	32.0	→SK10			
SP44	円	黒褐(10YR3/2)	A	36.0	30.0	39.0	→SK10,SP45			
SP45	楕 円	黒褐(10YR2/2)	A	—	—	—	→SK10,←SP44			
SP46	円	黒褐(10YR2/2)	A	25.0	—	32.0	→SK10			
SP47	円	暗褐(10YR3/3)	A	21.0	—	28.0	→SK10,←SP39,42			
SP48	円	灰黄褐(10YR4/2)	A	24.0	—	21.0	→SK8,←SK2			
SP49	楕 円	暗褐(10YR3/3)	A	[43.0]	39.0	31.0	→SK8,←SK2		6	
SP50	円	暗褐(10YR3/3)	A	25.0	—	21.0	←SD2			
SP51	楕 円	暗褐(10YR3/3)	A	48.0	32.0	46.0	←SD1			

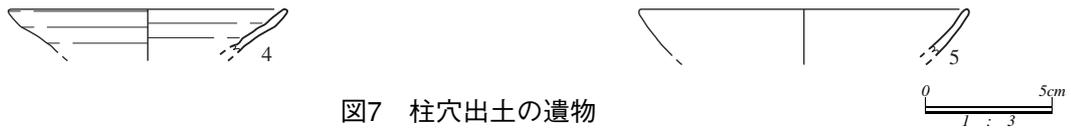


図7 柱穴出土の遺物

3 SP32(図6)

遺構 調査区中央部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.9mである。SP30・31に切られる。平面形は直径55.0cmの円形を呈する。検出面からの深さは46.0cmを測る。坑底は中央が一段深く掘り込まれる。

埋土は2層に分層できる。1層は黒褐色を呈する小礫混じり細砂で、柱の抜き取り痕に流入した土砂である。2層はにぶい黄褐色を呈する小礫混じり細砂で掘方埋土である。

遺物は出土していない。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

4 SP49(図6)

遺構 調査区北部で検出した。検出面はIII層下面、標高2.9mである。SK8を切り、SK2に切られる。平面形は短径39.0cmを測る楕円形を呈する。検出面からの深さは31.0cmを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、坑底はほぼ水平である。

埋土は2層に分層できる。1層は黒褐色を呈する小礫混じり細砂で、柱の抜き取り痕に流入した土砂である。2層はにぶい黄褐色を呈する小礫混じり細砂で掘方埋土である。

遺物は埋土中から土師器3点が出土したが、いずれも小片である。時期は古墳時代以降と考えられるが、詳細は不明である。

5 柱穴出土の遺物(図7)

土師器 4はSP25、5はSP11の埋土中からの出土である。いずれも杯で、4は直線的に、5は内湾気味に口縁部が外上方へのびる。

第5節 III層出土の遺物

1 弥生時代の遺物(図8)

弥生土器 6は壺の胴上半部である。肩部に直線文を2条巡らせ、直下に有軸の羽状文を施す。

土製品 7は紡錘車である。欠損していて軸孔は残存していない。断面形は上面中央部が盛り上がり、周辺部はていねいに面取りする。

石器 8はサヌカイトの縦長剥片である。素材剥片と考えられる。

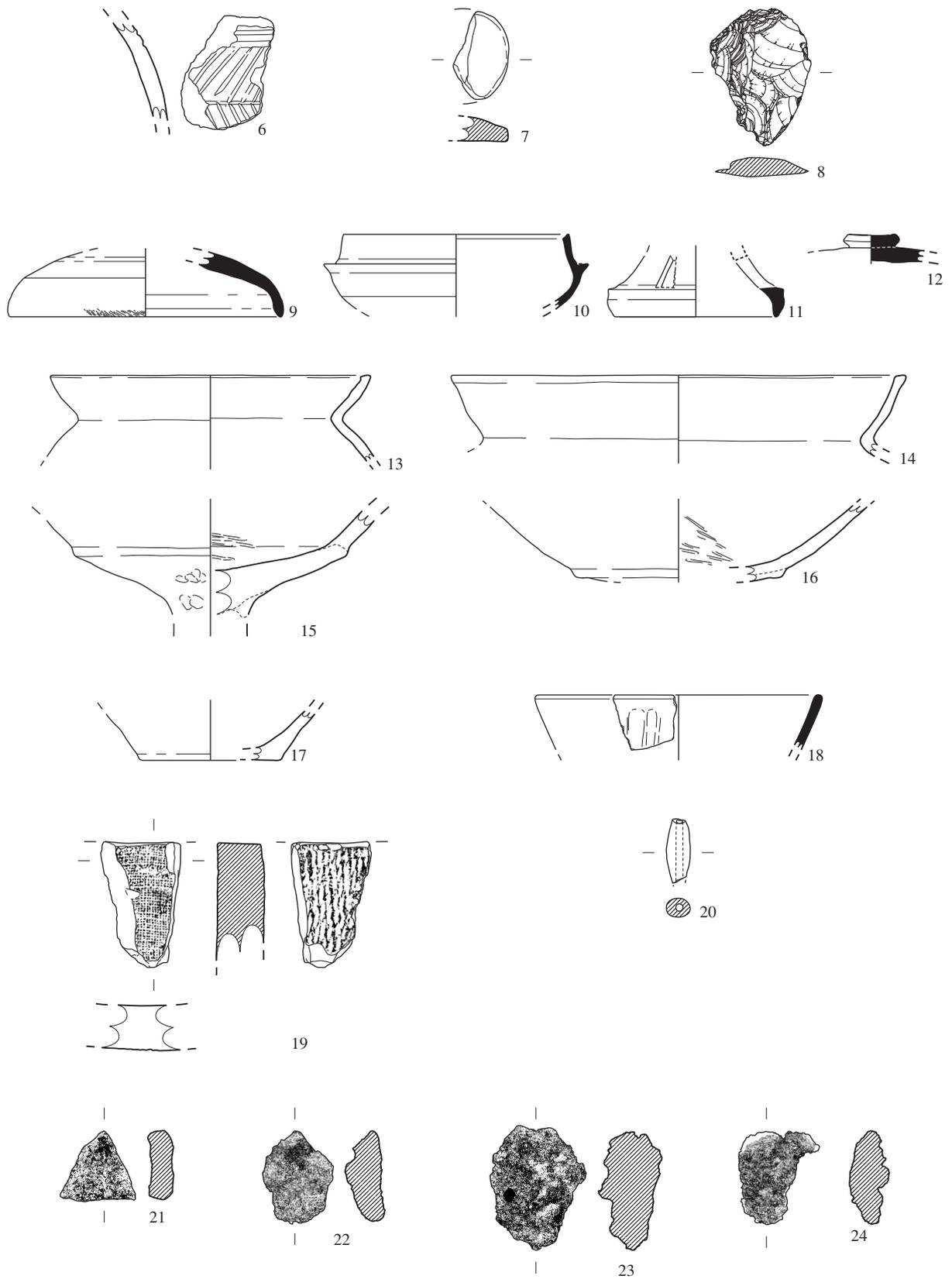


図8 包含層(III層)出土の遺物

0 5cm
1 : 3

2 古墳時代の遺物(図8)

須恵器 9は杯H蓋である。天井部は低く扁平で、天井部と口縁部の境は丸味をおびて不明瞭で、口縁部は開き気味に下がる。口縁端部は丸く収め、あいまいな内傾面をなす。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、口縁端部外面には縄目を残す。胎土は精良であるが焼成は甘く、器面は灰白色を呈する。10は杯Hである。立ち上がりはやや内傾し、口縁端部は内傾する凹面をなす。受部は短く水平にのび、底部は深く丸い。底部外面の2/3に回転ヘラケズリを施す。胎土は精良で、焼成も良好である。11は高杯の脚部である。短脚で3方向に長方形透孔を設ける。脚裾部は稜をなしてほぼ垂直に下り、尖り気味に丸い脚端部で接地する。胎土は精良で、焼成も良好である。12は杯A蓋であるつまみ部の小破片で全体形状は不明である。つまみは扁平で中央が浅く窪む。

土師器 13・14は甕の口縁部である。口縁部は内湾気味に外上方へのび、口縁端部は内端がわずかに肥厚して内傾面をなす。15・16は高杯である。杯底部と口縁部の境は屈曲して稜をなし、口縁部は外上方へ開く。杯部内面にミガキを施す。15は脚柱上端部が遺存するが、脚柱と杯部の接合は貼り付けによる。

3 古代・中世の遺物(図8)

土師器 17は杯である。口縁部は外反気味に外上方へのびる。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。

磁器 18は青磁である。口縁部はわずかに内湾して外上方へのびる。外面に痕跡的な連弁文が看取できる。釉調はオリーブ灰色を呈する。

土製品 19は平瓦である。凹面に布目、凸面に縄目を留める。須恵質で胎土は精良であるが、焼成が甘く灰白色を呈する。20は管状土錘である。平面形は細長い紡錘形を呈する。

鉄製品 21～24は鉄滓である。21は破損して平面形は三角形を呈するが、椀底状に丸く窪む。炉底滓の一部と考えられる。

表4 掲載遺物一覧

番号	種別	器種	出土情報	法量	外面色調 内面色調	調整	備考	図	図版
1	土師器	甑	SK4		10YR6/4 10YR6/4	o: i:		4	7
2	須恵器	杯	SD2	TR(17.0)	5Y7/1 5Y7/1	o:回転ナデ i:回転ナデ		5	7
3	瓦器	杯	SP1	TR13.3,LR3.5,H4.9	10YR5/1 N3/	o:ハケ→ナデ消 i:ハケ		6	7
4	土師器	杯	SP25	TR(10.8)	7.5YR6/2 10YR3/2	o:回転ナデ i:回転ナデ		7	7
5	土師器	杯	SP30	TR(13.5)	5Y5/1 5Y6/1	o: i:		7	7
6	弥生	壺	III層		7.5YR6/4 2.5YR6/8	o: i:		8	7
7	土製品	紡錘車	包含層 (SP35)	R(4.9),T[1.2]	5YR5/6 5YR4/6	o: i:		8	7
8	石器	剥片	包含層 (SP44)	L7.1,W5.2,T1.0,g35.25		o: i:	サヌカイト	8	7
9	須恵器	杯蓋	包含層 (SP34)	TR(13.8),H[3.5]	5Y5/1 5Y7/1	o:回転ヘラケズリ i:		8	7
10	須恵器	杯身	包含層 (SP4)	TR(11.4),MR(13.4)	N4/ N5/	o:回転ヘラケズリ i:		8	7
11	須恵器	高杯	III層	LR(8.1)	10BG5/1 5B5/1	o:カキ目 i:		8	7
12	須恵器	杯蓋	III層		2.5Y7/2 7.5Y6/1	o: i:		8	7
13	土師器	甕	包含層 (SP31)	TR(16.3),NR(13.5)	7.5YR4/4 7.5YR5/6	o: i:		8	7
14	土師器	甕	III層	TR(22.8),NR(19.9)	7.5YR6/6 7.5YR6/6	o: i:		8	7
15	土師器	高杯	III層		5YR6/8 5YR6/8	o: i:ミガキ		8	7
16	土師器	高杯	包含層 (SP2)		5YR5/6 5YR4/6	o: i:ミガキ		8	7
17	土師器	杯	III層	LR(7.0)	10YR8/2 10YR7/2	o: i:	回転ヘラ切	8	7
18	磁器	青磁碗	III層	TR(14.2)	釉:2.5GY6/1 胎土:7.5Y6/1	o: i:	連弁文	8	7
19	瓦	平瓦	III層		2.5Y5/2 2.5Y8/1	o:布目 i:縄目		8	7
20	土製品	土錘	III層	L3.4,R1.2	10YR6/4	o: i:		8	7
21	鉄製品	鉄滓	III層	L3.9,W3.5,T1.2,g27.85		o: i:		8	7
22	鉄製品	鉄滓	III層	L4.7,W3.7,T2.1,g32.10		o: i:		8	7
23	鉄製品	鉄滓	III層	L6.4,W4.9,T3.2,g96.62		o: i:		8	7
24	鉄製品	鉄滓	III層	L4.8,W4.1,T2.1,g31.2		o: i:		8	7

表5 出土遺物一覽(1)

時期	出土情報	種別	部位	器種	区分	点数	掲載番号
弥生 / 中世	SI1	須恵器	胴部		C	1	
		土師器	胴部		C	6	
	SK2	弥生	底部		B	1	
		須恵器	胴部		C	3	
		瓦質	口縁部	鍋	B	1	
		土師器	胴部	皿杯	B	1	
	SK3	土師質	胴部		C	12	
		土師器	胴部		C	1	
		須恵器	口縁部	杯蓋	B	1	
	SK4	土師器	胴部		C	3	
土師器		胴部		C	13		
SK5	土師器	底部	甗	A	1	1	
	土師器	胴部		C	6		
SK6	須恵器	胴部		C	2		
	土師器	底部	甗	B	1		
	土師器	脚部	高杯	B	1		
	土師器	口縁部	杯	B	1		
SK7	土師器	底部	杯	B	1		
	土師器	胴部		C	6		
SD2	須恵器	胴部		C	2		
	土師器	胴部		C	11		
	弥生	底部		B	1		
	須恵器	口縁部	杯	A	1	2	
	土師器	胴部		C	3		
	土師器	口縁部	杯	B	1		
	土師器	胴部		C	12		
	瓦質	胴部	鍋	C	2		
	土師質	胴部		C	2		
	鉄製品			C	1		
SP1	瓦器	完形	杯	A	1	3	
	土師質	胴部		C	1		
SP2	土師器	口縁部	杯	B	2		
	土師器	胴部		C	2		
SP4	須恵器	胴部		C	2		
	土師器	胴部		C	3		
SP6	土師器	胴部		C	1		
SP8	須恵器	胴部		C	1		
	瓦質	胴部		C	1		
SP9	土師器	胴部		C	1		
SP11	土師器	胴部		C	1		
SP14	土師器	胴部		C	1		
SP15	土師器	胴部		C	1		
	須恵器	底部	杯	B	1		
SP16	土師器	胴部		C	2		
	瓦質	胴部		C	1		
SP18	弥生	胴部		C	1		
	須恵器	胴部		C	1		
SP21	土師器	胴部		C	4		
	須恵器	口縁部	杯蓋	B	1		
SP22	須恵器	胴部		C	1		
	土師質	胴部		C	1		
	土師器	胴部		C	2		
SP23	須恵器	胴部		C	2		
	土師器	底部	杯	B	1		
	土師器	胴部		C	3		
	土師器	胴部		C	2		
SP25	須恵器	口縁部	杯蓋	B	1		
	土師器	口縁部	皿杯	A	1	4	
	土師器	胴部		C	4		
	土師器	胴部		C	4		

表6 出土遺物一覽(2)

時期	出土情報	種別	部位	器種	区分	点数	掲載番号
弥生 / 中世	SP26	土師器	胴部		C	1	
	SP29	土師器	胴部		C	2	
	SP30	土師器	口縁部	杯	A	1	5
		土師器	胴部		C	4	
	SP31	鉄製品	身部	釘	B	1	
		土師器	口縁部	甗	A	1	13
	SP34	土師器	胴部		C	4	
		須恵器	口縁部	杯蓋	A	1	9
	SP35	土師器	胴部		C	2	
		土師器	胴部		C	9	
SP36	土師質	脚部	紡錘車	A	1	7	
	土師質	脚部	土鍋	C	1		
SP39	土師器	胴部		C	2		
SP40	土師器	胴部		C	3		
SP43	土師器	胴部		C	1		
	土師器	杯底	高杯	A	1	16	
SP44	石器	胴部	剥片	A	1	8	
SP45	土師器	胴部		C	1		
	土師器	胴部		C	1		
SP46	瓦質	胴部		C	1		
	土師器	胴部		C	4		
SP49	土師質	胴部		C	1		
	土師器	胴部		C	3		
SP50	須恵器	口縁部	杯身	A	1	10	
	土師器	口縁部	甗	B	1		
III層	弥生	土師器	胴部		C	1	
		土師器	胴部	壺	A	1	6
	弥生土師	土師器	杯底部	高杯	A	1	15
		土師器	杯底部	高杯	B	1	
	須恵器	土師器	胴部		C	130	
		土師器	口縁部	蓋杯	B	6	
	つまみ部	土師器	口縁部	甗	B	1	
		土師器	脚部	杯蓋	A	1	12
	脚部	土師器	脚部	高杯	A	1	11
		土師器	脚部	高杯	B	1	
胴部	土師器	胴部		C	83		
	土師器	口縁部	杯	B	3		
底部	土師器	口縁部	甗	A	1	14	
	土師器	底部	杯	B	1	17	
把手	土師器	底部	杯	A	1	7	
	土師器	把手	甗	B	1		
胴部	土師器	胴部		C	108		
	土師質	口縁部	鍋・釜	B	2		
瓦器	土師質	胴部		C	20		
	瓦器	胴部	椀	C	5		
瓦質	瓦質	胴部		C	19		
	陶器	胴部	甗	C	7		
磁器	磁器	口縁部	青磁碗	A	1	18	
	土製品	土製品	土錘	A	1	20	
瓦	瓦	端部	平瓦	A	1	19	
	瓦	胴部		C	17		
石器	石器	胴部	剥片	B	1		
	鉄製品	胴部	釘	B	1		
鉄製品	鉄製品	胴部	鉄滓	A	4	21~24	
	鉄製品	胴部	鉄滓	B	7		
トレンチ	須恵器	胴部		C	3		
	土師器	口縁部	甗	B	1		
	土師器	胴部		C	26		
	瓦器	口縁部	小皿	B	1		
	瓦質	胴部		C	1		
	瓦質	胴部		C	2		
	陶器	胴部	甗	C	1		
	陶器	胴部	甗	C	1		
	鉄製品	胴部	鉄滓	B	1		
	鉄製品	胴部	鉄滓	B	1		

第5章 まとめ

今回の調査は郷桜井堀遺跡の3次調査である。調査範囲は前回までの調査に比べても、さらに狭小であり、遺跡の全容をとらえることは不可能である。詳細な時期ごとの比較は難しいが、2次調査区では遺構の大半を柱穴が占めていたのに対し、3次調査区では竪穴住居や土坑など、より大型の遺構が多い。検出面の標高が2次調査区では2.5m前後であるのに対し、3次調査区では3m弱と、50cm程度高く、住環境としてはより良好であったためと考えられる。一方、遺物では2次調査区で一定量認められた弥生時代前期の遠賀川系土器が、3次調査区ではほとんど認められないほか、縄文時代晩期の突帯文土器は今回の調査では出土していない。古墳時代以降の遺物についてはほとんど差違は認められない。県教委の試掘調査では、3次調査区の北西は河川堆積で遺跡が遺存していないことが明らかとなっているため、3次調査区は集落の北限に近いと考えられる。前回までの調査でも指摘したように、郷桜井堀遺跡は浜堤もしくは自然堤防上に営まれた遺跡で、初現は縄文時代晩期にまで遡り、断続的に中世まで営まれた集落遺跡である。しかしながら、各時期の遺跡の広がりや構造、またその変遷や消長の具体相は、調査範囲が限られていることもあって把握するに至っていない。今後、周辺地域での調査の進展と資料の蓄積が期待される。

四 版

凡 例

1. 遺物写真の縮率は、約1/3である。
2. 遺構写真・遺物写真とも真鍋が撮影した。



遺跡遠景(霊仙山より)



遺構検出状況(北西より)



完掘状況(北西より)



基本層序西壁(北より)



基本層序西壁(東より)



SI1土層断面(東より)



SI1完掘(北より)



SK1土層断面(東より)



SK1完掘(南東より)



SK2土層断面(西より)



SK2完掘(北西より)



SK3土層断面(東より)



SK4土層断面(北西より)



SK4完掘(北西より)



SK5北-東土層断面(北より)



SK5南-西土層断面(南より)



SK5完掘(北西より)



SK9・SK6土層断面(東より)



SK7・SK8土層断面(東より)



SK9東-西土層断面(南より)



SK9完掘(北西より)



SK10東-西土層断面(南より)



SD1土層断面(西より)



SD2土層断面(東より)



SD1・SD2完掘(北西より)



SP1遺物(3)出土状況(南上より)



SP1完掘(東より)



SP23土層断面(東より)



報告書抄録

ふりがな	ごうさくらいほりいせきさんじ							
書名	郷桜井堀遺跡3次							
副書名	一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 3							
巻次								
シリーズ名	埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第148集							
編著者名	眞鍋 昭文							
編集機関	財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68-1 TEL (089) 911-0502							
発行年月日	西暦 2008年 3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごうさくらいほりいせき 郷桜井堀遺跡	えひめけんいまばりし 愛媛県今治市 ごうさくらいいっちょうめ 郷桜井1丁目 こう 甲207-10	38202		34°01'52"	133°01'50"	20071009) 20071029	25	一般県道 桜井山路線 道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
郷桜井堀遺跡	散布地	弥生 古墳 中世	竪穴住居×1 土坑×10 溝×2 柱穴×51	弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・陶磁器・土製品(瓦・土錘)・石器(剥片)・金属製品(鉄滓)				
要約	浜堤状の微高地上に営まれた集落遺跡である。弥生時代では少量ながら遠賀川系土器が出土した。古墳時代以後、中世にかけての遺物が出土しているが、特段に国分尼寺との関連を想起させるような遺物は認められない。中世では12世紀後半から13世紀前半頃の遺物が多く、鉄滓や青磁、在地産の瓦器杯などが出土している。遺構は土坑のほかにも多数の柱穴を検出したが、調査範囲が限定されていたため、具体的な建物配置等は不明である。							

埋蔵文化財発掘調査報告書 第148集

郷桜井堀遺跡3次
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月

編集・発行 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
愛媛県松山市衣山四丁目68-1
TEL (089) 911-0502

印刷 原印刷株式会社